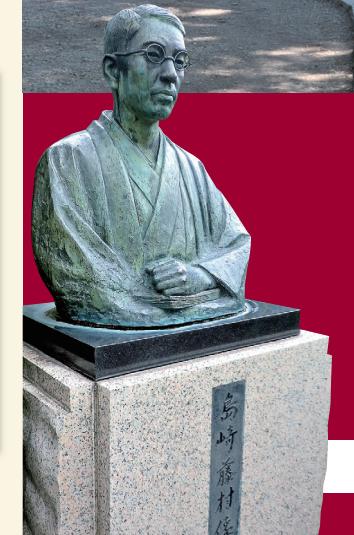
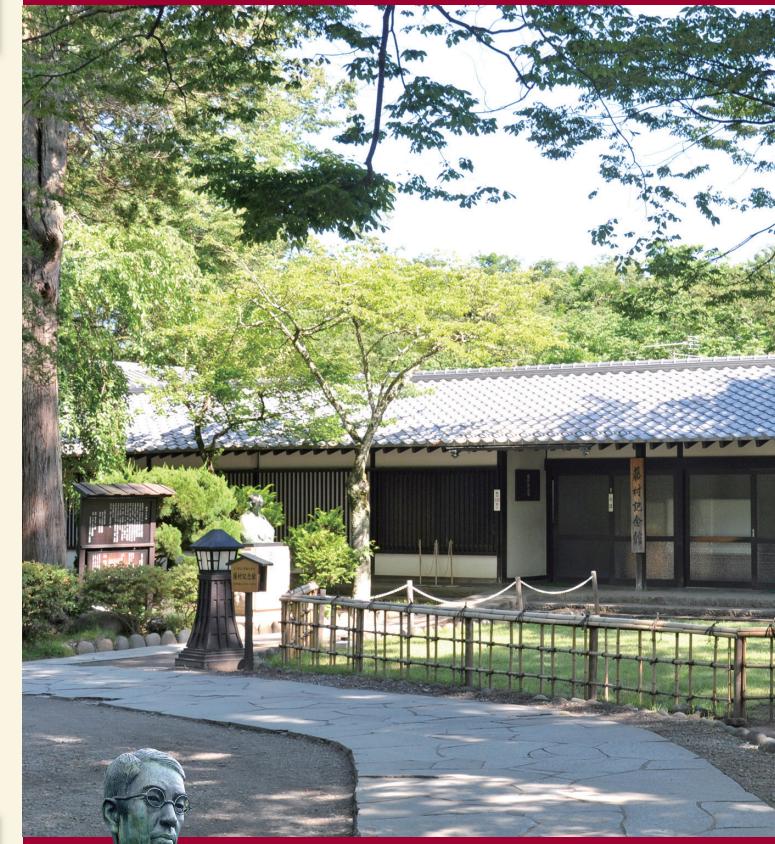


# 小諸市立 藤村記念館

Memorial Hall of Toson



◆開館時間／9:00～17:00

※12月～3月は9:00～16:30

◆休館日／年末年始(12/29～1/3)

※12月～3月(第2週)まで水曜休館

〒384-0804 小諸市丁315  
TEL.0267-22-1130

懐古園内(小諸駅より徒歩5分)

## 島崎藤村 (1872年-1943年)



詩人・小説家。

明治学院(現明治学院大学)本科卒業。

詩集『若菜集』を発行し詩人として名声を得る。

明治32年、国語と英語の教師として小諸義塾に赴任。以後6年1カ月を小諸で過ごす。

小諸の風土や生活などを題材にして書き留めた『千曲川のスケッチ』は、当時の小諸の様子を生き生きと今に伝えている。

## 千曲川旅情のうた(一)

小諸なる古城のほとり  
雲白く遊子かななしむ  
みどりなすはへはもえず  
若草も籍くによしなし  
しろがねの食の岡辺  
日に溶けて淡雪流る  
あたかき光はあれど  
野に満つる香も知らず  
浅くのみ春は霞みて  
麦の色わづかに青し  
旅人の群はいくつか  
畠中の道を急ぎぬ  
暮れ行けば浅間も見えず  
うたかなし佐久の草笛  
千曲川いざよふ波の  
岸近き宿にのぼりつ  
濁り酒濁れる飲みて  
草枕しばし慰む

## 千曲川旅情のうた(二)

昨日またかくてありけり  
この命なにをあくせく  
明日をのみ思ひわづらふ  
いくたびか栄枯の夢の  
消え残る谷に下りて  
阿波のいざよふ見れば  
砂まじり水巻き帰る  
嗚呼古城なにをか語り  
過し世を静かに思へ  
百年もさのふのごとし  
千曲川柳霞みて  
たゞひとり岩をめぐりて  
この岸に愁を繋ぐ

## 千曲川旅情のうた

小諸なる古城のほとり  
かゑしもみどりあすせんこちもえす  
さうくさむよくせんせしよくさむ  
さすおしゃべりあはは雲流る  
あたかの光あわせられてみほを香る  
さらすあさくさくわざうさくもそくを  
僅うまし旅人のもれてもくばうさく  
遊ばれきぬされゆしてあさまも尼えす  
うだかかし代えしよくさく千曲川  
迷いし手ちやうやうかわでてあさまも尼えす  
まごむ飲みてやうやうさくも尼えす  
まごむ飲みてやうやうさくも尼えす

藤村直筆の『千曲川旅情のうた』



藤村詩碑



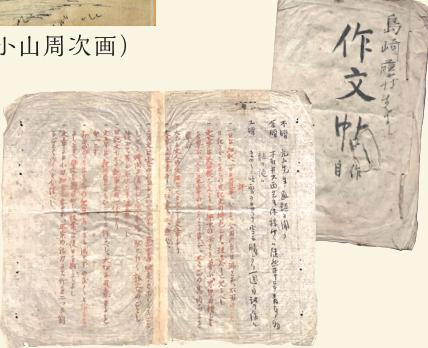
『裾野の雲』藤村直筆の序文原稿



小諸義塾のスケッチ(小山周次画)



小諸義塾の教師時に  
藤村が添削した作文帖



小諸義塾の教師時に  
藤村が添削した作文帖

藤村が懐古園にて  
したためた色紙

# 藤村記念館

藤村の遺墨、遺品並びに関係資料を収集保管し、教養と調査研究に資する目的のもと、東京工業大学教授谷口吉郎博士の設計により、昭和32年11月高雅で簡素な建物が懐古園内に竣工した。昭和33年4月19日に開館し、翌34年6月藤村会より小諸市に移管され、以後、小諸市立藤村記念館として運営し今日に至る。

## 藤村著作の初版本



『千曲川のスケッチ』



『破戒』



『落梅集』

## 藤村が馬場裏の住居で愛用したもの



茶器



矢立て  
(紙切り用小刀がついている)



灰皿セット

## 藤村ゆかりの地

### 小諸義塾跡

小諸義塾は明治26年創立。明治29年、耳取町に洋館二階建ての校舎を建設。塾長は木村熊二。明治39年廃校。後、小諸駅拡張のため駅構内に入る。昭和63年「小諸義塾跡」碑を建立。その向かい側に塾舎が復元され、平成8年「小諸義塾記念館」が開館する。



小諸義塾跡の碑

### 木村熊二記念碑

昭和11年、懐古園の二の丸石垣の自然石に設置。藤村筆「われらの父木村先生と旧小諸義塾の記念に」の文字を刻んだ碑。彫刻家荻島安二の作。



木村熊二記念碑

### 藤村詩碑

昭和2年、懐古園内の眼下に千曲川、彼方に浅間山を望む浅間台の地に建碑される。自然石に青銅のパネルをはめ込んだ碑である。碑面の詩は藤村自書による『千曲川旅情のうた』で、パネルは高村豊周の作。



藤村旧栖地に建つ碑

### 藤村旧栖地

昭和28年、小諸町馬場裏の旧居跡に碑を建立。碑面の文字は有島生馬の揮毫。

## 藤村と小諸

### 明治

### 事項 『主な作品』

32年 4月 木村熊二の経営する小諸義塾に国語と英語の教師として赴任。(満27歳)  
函館の網問屋秦慶治の三女冬子と結婚。  
馬場裏の土族屋敷跡で新家庭を持つ。

33年 5月 長女縁が生まれる。  
『千曲川のスケッチ』の初稿に着手したのもこの頃。

### 『旅情』『雲』

34年 4月 小諸義塾に女子学習舎を併設。

### 『落梅集』

35年 3月 二女孝子が生まれる。

10月 学生を引率して八ヶ岳の裾野を回り、甲府、諏訪方面への旅をする。

### 『旧主人』『藁草履』

36年 5月 小諸義塾創立10周年記念祭挙行。

### 『爺』『老娘』

37年 1月 女子学生の講習会参加の引率を兼ねて、飯山町を訪ねる。  
この頃、『破戒』の原稿を書き始める。

4月 三女縫子が生まれる。

7月 『破戒』自費出版の援助を求めて函館の岳父を訪ね、400円の出費を頼む。

10月 丸山晩霞等と志賀村に神津猛を訪ねる。

### 『水彩画家』『椰子の葉陰』 『藤村詩集』『津軽海峡』

38年 3月 神津猛より『破戒』完成までの生活費として150円を借用する。

4月 小諸義塾を退職し、6年1ヶ月にわたる小諸生活に別れを告げ家族と上京する。